



ドン、トルウ (Dong-Triou) 及びアロン灣 (Along Bay) の無烟炭田及びビトラン、バク (Trang-Bach) の粘土産地との水道と成るべし。

右運河は鐵鑛埋藏地たるタイ、ヌエンの東方を通過すると同時に一面六哩乃至九哩の運鑛鐵道を敷設するときはタイ、ヌエンよりファン、メ (Phan-Me) ラン、カム (Lang-Cam) の石炭及び骸炭産地に到達し得べく又右鐵道數哩の敷設計畫も亦擡頭し居り資金を得次第必要なる地下工事の發展を計る事と爲り居れり。

右實現せらるゝ曉に於てはタイ、ヌエンは勿論ドン、トルウ及びアロン灣地方に於て石灰石を含有するや否やの如き問題は最早論ずるに足らざるなり、地方狀況は専門的技術眼を以てするときは次ぎに來るべき計畫は此地方に於ける骸炭用石炭若くは骸炭或は無烟炭を使用する一二基の鑄鑛爐を建設し低廉なる鐵の製産を企圖すべき事是れなり。

實際斯くの如き工業を印度支那にて設立する事は歐式を採用したる諸國即ち日本の如きは一九二〇年には鐵鑛六十八萬九千噸を輸入し又セレベス島に良鐵鑛を多量に有する蘭領印度の如き石炭無きため高價なる輸入外國骸炭を使用するか若くは其の豊富なる水力を利用し電氣製鐵をなすべきかに付き今尙其實現に躊躇しつゝある此等諸國に比し遙かに有利の要素を有せり。

支那は製鐵原料を有するも目下國狀不安且つ専門技術家を有せず同時に又外國人の教導を好まざるため斯の如き複雑なる工業を營むに適せざるなり。尤も漢陽及び漢口の工場に於ては一九一五年中其有する四基の鑄鑛爐と六基のマルチン爐

とにて鑄鐵十四萬噸、鋼八萬二千噸を製出したるも一九二二年に之を閉鎖せり、其の原因は多分政治上の基因すると同時に經濟上の關係にも因りたるならん、而して有名なる技師の報告に據るに工場管理法當を得ざるため工場は優良なるに拘はらず其製産は不規則にして品質不良且つ非帝に高値なりと稱せり。

鐵道増設せられつつある印度支那に於ける製鐵業は其版路を内地に維持すると同時に其の市場を外國に物色すべき事勿論にして其の有望視せらるゝ市場は人口豊富にして又鐵道の少なき支那にありとす、同時に日本は又其の缺乏する鐵を得んがため多年努力しつつある處にして其のために派遣せられたる人々は極東及び馬來群島を普ねく旅行し印度支那の鐵鑛探掘の目的を以て河内にまでも來りたる事あり、一九二一年十二月三日のジュニー、シザイル紙に據るときは年々十萬噸の鑄鐵供給に關し英領印度のタタ鐵鋼會社と長き契約を訂結したりと云ふ。

右の如き市場の存在により或る會社は印度支那に於て製鐵所を有利に設立し得べき事容易にして又原料の一種又は數種が原價高値にして夫れがため其製品の販路を得難さが如き恐れを抱くに及ばざるなり。

吾佛國の有力なる鐵工業の爲め極東市場を保留し置く事は勿論望む所なるも右原料を歐洲に送るときは其製品の價格を増嵩せしむるの瑕瑾あり、即ち戰前歐洲市場の製品一噸十七金法にして歐洲市場に於ける精製鋼板代價の百分の三なりしに極東市場にては百十七金法即ち百分の十七に相當せり、尙歐洲より印度支那に其製品を輸入すると又印度支那自らの製

品との價格を比較するに鐵軌條に於て五十法即ち二割の經濟と爲るなり、故に吾人は吾が製鐵業者が全體の關係を研究したる上印度支那に鐵を輸入すべきや將た又同地に於て之を製産すべきやを決定せん事を希望する處にして其の總ての關係に於て良好なる方法を撰み其結論に達するや否や直ちに之れが實行に着手せん事を希望する者なり。

安南 安南には多量の純粹なる富鐵鑛の埋藏ありて多くは土人之れが採掘を爲せり、就中鐵鑛業者間にて著名なるは東京境の諸州なりとすタン、ホア (Thanh-Hoa) の北方六哩に在るドアンハ (Doan-ha) の鑛量は多量にして海防の鎔鑛爐に一千噸の鐵鑛を供給したる磁鐵鑛の層ありタン、ホア州に在る酸化鐵鑛及び滿俺は劣等金屬塗料の製造會社にて之を採掘し居れり同州のヴァン、アム (Van-am) 及びヌイ、ヌア (Nui-Nua) にてはクローム鐵鑛を發見したるも未だ採掘に着手するに至らざるなり。

カムラン灣の海濱及び周圍の砂丘にてチタン鐵砂を發見し或る會社は其採集の計畫中なり。

カンボチャ コンポン、トム (Kompong-Thom) の北方四十三哩に在るフノムデク (Phnom-Dek) の鐵鑛は(増水中コンポン、トム河を溯航する事を得クウイ (Khouys) 種族之れを採掘して有名なる鐵器製造の原料と爲す。

右鐵鑛所在地を視察したるフツク氏は「印度支那の埋藏鑛石報告」(一八八二年アンナル、デ、ミン中に迸發岩の丘陵を横斷する純粹なる富鑛の一大團塊なりと記載せり、右は現實に之を確められたりしも或る會社に於て同地を距る約九十哩に在る眉江のコーン (Khong) 瀑布より得る水力に依る電氣製

鐵爐カンボチャの森林より得たる木炭を用ふる鎔鑛爐の築造を計畫したりしも其計畫拙劣貧弱にして之れより更に何等の新事實を世上に提供する事を得ざりしなり。

### ◎釜石鑛山の新組織

釜石の田中鑛山會社は今回三井鑛山の經營に移る可く内相談が決定し、近く臨時總會を開いて定款の變更をする筈である、同社は資本金二千萬圓全額拂込み済みて、故田中長兵衛氏一家の經營であつたが、戦後製鐵事業不況の爲め九基の鎔鑛爐の中、七基迄は休止し第八、第九が交代で一基宛火を入れ、一基の能力公稱一日二百噸で、昨年は一ヶ年四萬四千噸の産額であつた、併も斯界不況の影響を受け經營難に陥り一千二百萬圓内外の負債を生じ、運轉資金の欠乏から全く行き詰つて居つたそこで三井は二千萬圓(二十萬株)の資本金中一千八百萬圓(十八萬株)を引き取り、田中氏一家が二百萬圓(二萬株)を持つ事となり、取締役會長に牧田環氏、常務に三井の木瀬和吉、西村小次郎兩氏と現田中鑛山常務の香村小銀氏が就任すべく、社名も釜石鑛山會社と改稱さるる筈である、而して三井の手に移つて後は第一期改良擴張資金として二百十餘萬圓を注入し現在の第八、第九の鎔鑛爐を同時に使用するのである、釜石と輪西とは十二三年前合同問題があつた程で兩者の關係は可なり古くから繼續され釜石は三井から北海道炭の供給を受けて居つたので、今後は三井の手に依つて釜石に北海道炭を送り、鑛石不足の輪西製鐵所へ釜石の鑛石を供給すれば有無相通じて有利に經營されるであらうと見られて居る。

因みに田中鑛山會社に含まれて居る臺灣の金鑛經營は依然田中氏の經營に置くのである。

右改良擴張は約一ヶ年後に竣成し、其曉は銑鐵年十二萬噸(内販賣高七萬五千噸)、鋼材四萬五千噸、鑄鐵管一萬四千五百噸の産額を見る豫定なりと云ふ。